

三雲・井原遺跡下西地区の方形環溝について

—三雲下西遺跡1261番地2次調査の調査成果から—

江崎 靖隆（伊都国歴史博物館）

1. はじめに

三雲・井原遺跡は、糸島地域における中核的大規模集落である。弥生時代初頭に支石墓を中心とする集落形成が始まり、弥生時代中期後半から集落規模を拡大、厚葬墓の出現や多器種の楽浪系土器の出土など『魏志倭人伝』の記載を裏付ける遺構・遺物が存在し、その遺跡の重要性から、平成29年10月に国指定史跡となった。

本稿で取り扱う三雲・井原遺跡下西地区は、平成14年度から行われた重要遺跡確認調査により、弥生時代中期末に掘削された方形環溝が部分的に確認され、首長居館の可能性から注目を集めた。しかし、この区画溝の周辺は、住宅地であるため、区画溝の延長方向や内部構造を知るための調査が困難である。

このような中、平成22年度に下西地区1261番地に下水道敷設が計画され、それに伴う発掘調査が行われた。非常に狭い範囲で行われたこの調査では、下西地区534番地で検出した南北方向の区画溝が続くことを確認した。

今回は、下西地区1261番地2次調査の成果について報告し、そこから推測される方形環溝の復元と歴史的な位置付けを行ったうえで、方形環溝について、予察的な考察を行いたい。

2. 下西地区1261番地2次調査の成果

下西地区1261番地2次調査は、前述したように、下水道敷設に伴う調査であったため、幅1.0m、長さ40mの細長いトレンチを設定し、調査区東側はマンホールが設置されるため、幅2.7m、長さ8.5mの調査区を設定した。このため、トレンチは溝で区切られた方形区画の内部を斜めに横断する形となっている。調査面積は、63㎡である。

主な遺構としては、弥生時代の東側区画溝や竪穴式住居6軒（布留期）、土坑（中世）、ピット等を検出し、方形環溝の東側部分を確定することができたが、弥生時代の内部施設を確認すること

はできなかった。なお、本稿では紙面の都合上、東側区画溝を中心とした報告としたい。

（1）東側区画溝（南北方向）

調査区東端で検出した東側区画溝である。下西地区534番地の北側区画溝（東西方向）から直角に曲がり、東側区画溝（南北方向）の延長線上で確認でき、想定通りである。

東側区画溝は、長さ3.3m分を検出し、中央に第4トレンチを設定した。調査の結果、幅2.9～3.2m、深さ1.0mを測り、断面形態が逆台形状となる。床面の標高は36.860mである。

土層は、大きく4～10層の堆積層と1～3層の明確な掘り直し層に分かれ、一度、区画溝は埋没した後に掘り直されていることが分かる。これは、前回の調査（下西地区534番地）でも確認されており、基本的な土層も同じである。

まず、掘り直し前である当初の区画溝の土層は、茶褐色土層（4～8層）と最下層である砂質土層（9、10層）に区分できる。10層はほぼ川砂であることから、ある程度の水の流れを想定できるが、土器がほとんど含まれていない。4～8層は、弥生時代中期後半～後期前半の土器が含まれるが、細片が多い。

掘り直しの区画溝は、断面が漏斗状の形で、幅1.92m、深さ0.84mを測る。下西地区534番地の第3トレンチでは、幅2.48m、深さ0.96mであることから、いずれのトレンチでも当初の区画溝と比べて、幅が小さくなり、深さが浅くなる。

1～3層の掘り直し層は、礫が少なく、完形に近い土器が大量に出土する1、2層と土器が少なく、礫が非常に多い3層に大きく分かれている。1、2層の土器は、壺、甕、鉢、高杯、器台、支脚など器種が比較的良好にそろっているが、壺と甕が最も多く、高杯、鉢器台は少ない。完形の土器が多く、3層が埋まった後に、弥生時代後期初頭～前半を中心に、弥生時代後期後半までの土器が、区画溝の廃絶に伴い投げ込まれている状況である。

この掘り直し及び土器廃棄は、東側区画溝のみで確認でき、北側区画溝では確認することができないため、東側を意識して行われていると考えられる。

(2) 竪穴式住居

竪穴式住居は6軒確認されているが、幅1.0mの細長いトレンチであることや住居同士の切り合いもあって、竪穴式住居であるかどうか判断が難しい。出土土器は布留期であり、方形環溝と同時期ではない。下西地区では、弥生時代終末期～古墳時代前期後半までの住居が密集しており、方形環溝を破壊していることから、この頃には方形区画は意識されていないことになる。

(3) 土坑、ピット等

確認できている土坑は、p18、21、26、28、55の5基であり、建物の柱穴と考えられるが、出土土器は全て中世である。ピットも多数検出されているが、土器の出土は少なく、時期が判断できないものが多い。

(4) 区画溝の出土土器(第5～9図)

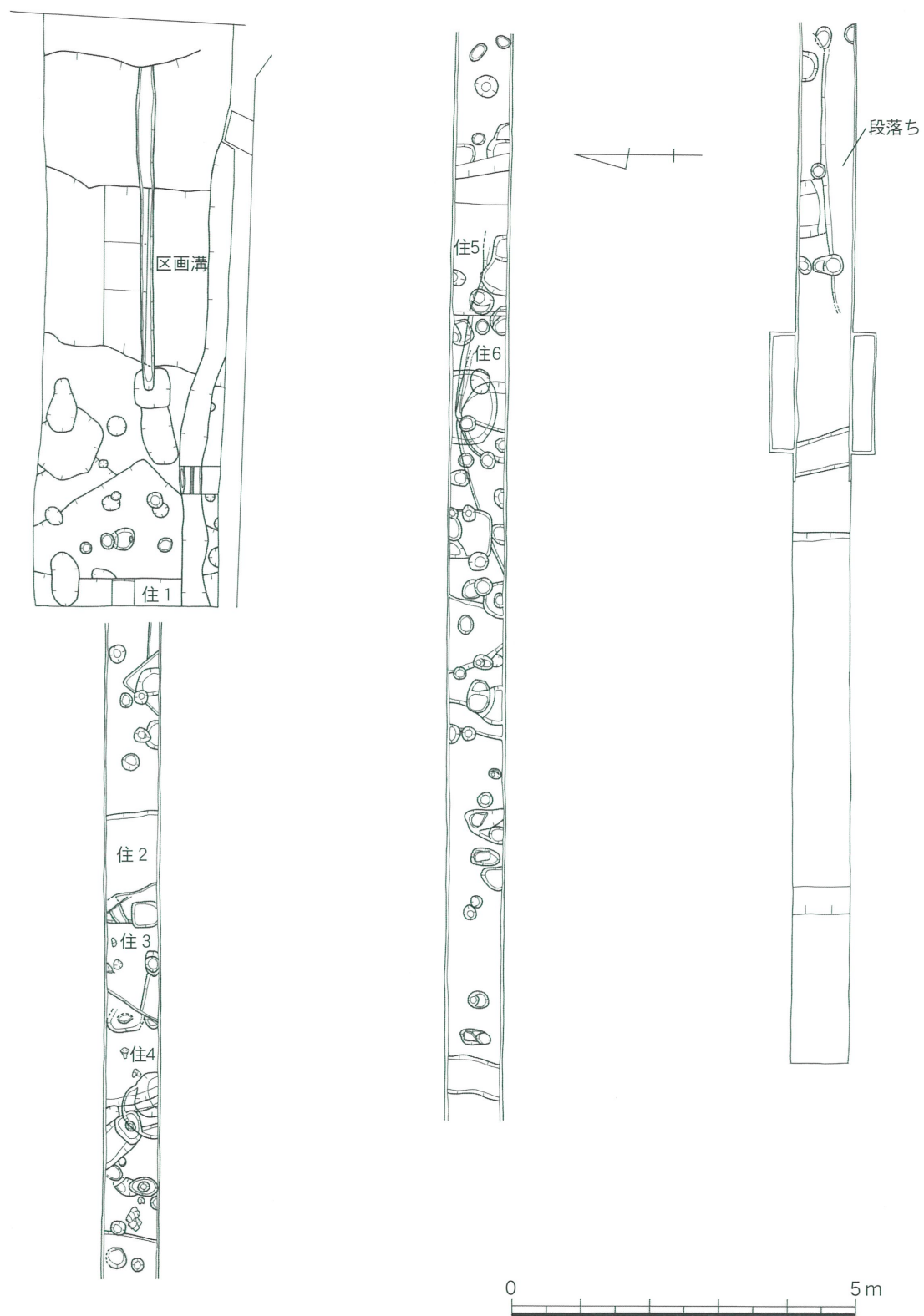
1～17は、区画溝の掘り直し(1、2層)から出土した土器で、土器1～14の各番号は、第2図の土器出土状況にそれぞれ対応する。

1は、壺の口縁部片で、素口縁である。2は、甕の底部片で、平底。3は、鋤先口縁の高坏の坏部。丹塗磨研であるが、外面に縦方向の刷毛目が残る。弥生時代中期後半～末である。4は、器台で口縁内面に横方向の刷毛目を施す。5は、くの字状の口縁をもつ甕で、体部外面には縦方向の刷毛目を施す。弥生時代後期前半。6は、壺の胴下半部分で、外面は丹塗磨研である。外面には縦方向の刷毛目が残る。7は、壺の胴下半部分である。平底で、外面に縦方向の刷毛目がわずかに残る。8は、甕の底部片。9は、壺の胴部片で、底部穿孔している。10は、くの字口縁をもつ甕で、平底である。内外面共に刷毛目を施す。弥生時代後期前半。11は、くの字口縁となる甕で、外面には二次焼成痕がある。胴部外面は縦方向の刷毛目を施す。弥生時代後期前半。12は、短頸壺で、胴部穿孔している。弥生時代後期初頭。13は、甕の底部片で、平底。外面は縦方向の刷毛目を施す。14は、鋤先口縁壺の上半部の破片で、鋤先口縁がL

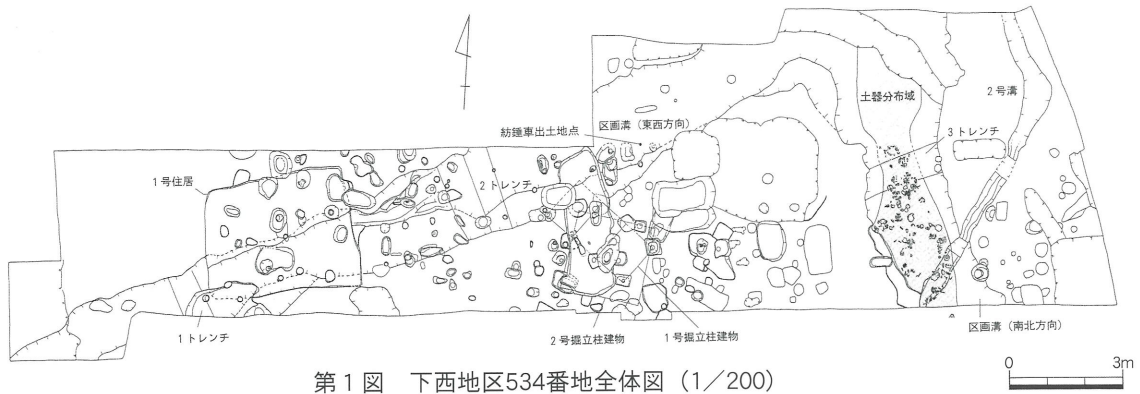
字状となる。弥生時代中期末～後期初頭。15は、鋤先口縁が直立気味となった鉢で、底部穿孔している。外面胴部の縦方向の刷毛目が残る。弥生時代後期初頭～前半。16は、やや内傾するL字状口縁をもつ壺で、胴上半部のみの残存である。内外面共に刷毛目が残る。17は、くの字口縁をもつ甕で、胴上位のみ残存する。外面に縦方向の刷毛目を施す。

18～55までは、区画溝の4～10層から出土した土器である。1～3層出土土器と比べて、細片が多い。18は、くの字口縁をもつ甕で、口縁部のみ残存する。19は、逆L字状の口縁をもつ甕である。外面に縦方向の刷毛目を施す。20は、素口縁の壺で、21の壺底部片と同一個体と考えられる。22は、くの字口縁の鉢で、胴部外面は縦方向の刷毛目、胴部内面は板ナデを施す。弥生時代後期前半。23～26は、くの字口縁甕の胴上部片である。外面に縦方向の刷毛目を残す。27は逆L字状口縁をもつ小形甕で、胴上部のみ残存。28～33は、甕の口縁部片で、くの字状になるものが多い。32は、二次焼成痕が外面に残る。34～40は、甕の底部片で、外面は縦方向の刷毛目を残す。41は、袋状口縁壺の口縁部片であるが、丹塗りではない。42は複合口縁壺の口縁部片である。43は素口縁壺の口縁部片で、内外ともに刷毛目がわずかに残る。44～46は、壺の底部片で、外面には縦方向の刷毛目を施す。すべて平底である。47は壺の胴下半部分のみの残存。平底で、外面には縦方向の刷毛目を施す。外面丹塗りである。48は、逆L字状口縁を持つ鉢で、口縁直下に三角突帯を貼付する。内外面ともに丹塗りである。弥生時代後期初頭。49は高杯の脚部片で、外面丹塗りである。50も高杯の脚部片で、外面調整は板ナデである。51は、器台で下半部のみの残存である。外面には指頭圧痕が残る。52、53は、器台の脚部片。54、55は手づくね土器で、鉢形である。54は完形である。

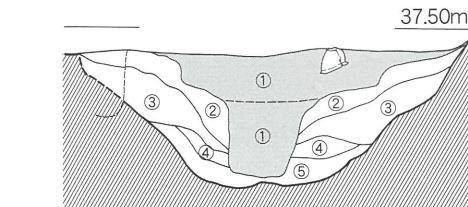
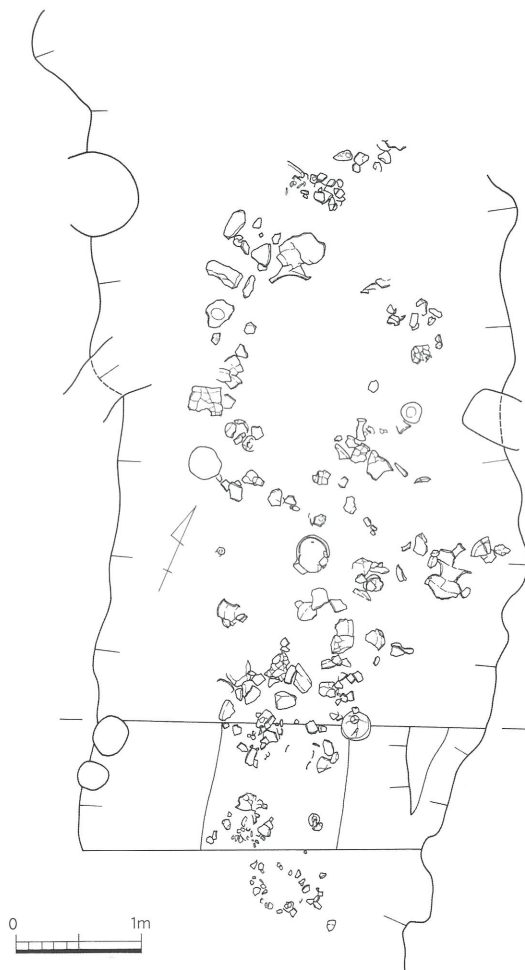
第9図の55～60は、参考資料として、下西地区534番地における東側区画溝(南北方向)の掘り直し部分から出土した土器群から、埋没時期に近い土器を掲載したものである。59、60は弥生時代後期前半～中ごろで、他は弥生時代後期後半であり、この頃の埋没と考えてよい。



第1図 下西地区1261番地2次調査全体図 (1/100)

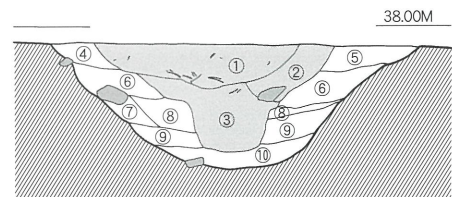
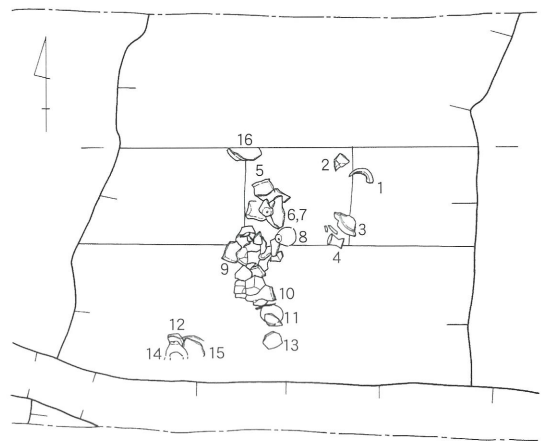


第1図 下西地区534番地全体図 (1/200)



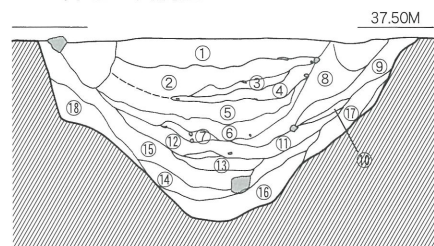
- (3号トレンチ)
- ①暗褐色粘質土 (後期後半完形土器片含む)
 - ②暗褐色粘質土
 - ③明灰褐色土
 - ④砂礫土
 - ⑤灰褐色砂質土
 - ②暗灰褐色土 (炭含む)
 - 地山: 細砂質土、砂礫土

下西地区534番地土器出土状況および
第3トレンチ土層断面実測図 (1/60)



- 14年度調査①、①'対応掘り直し
- 14年度調査②層と対応
- 14年度調査③層と対応
- 14年度調査④層と対応
- 14年度調査⑤層と対応
- ①灰茶褐色粘質土層 (礫・土器共に非常に多い, 弥生中～後期後半)
 - ②明灰茶色土層 (礫を大変多く含む)
 - ③暗灰茶色土層 (礫を非常に多く含む, ①層に比べて土器の出土は少ない)
 - ④茶褐色粘質土層
 - ⑤茶褐色土層 (④層と比べて礫が非常に多い)
 - ⑥黄茶色砂質土層 (礫の混入が少ない)
 - ⑦暗黄茶色砂質土層 (礫の混入が少ない)
 - ⑧暗黄茶色土層 (礫が非常に少ない)
 - ⑨明褐色砂層 (細石が多い)
 - ⑩暗褐色砂層 (埋土は、川砂のような細かさ)

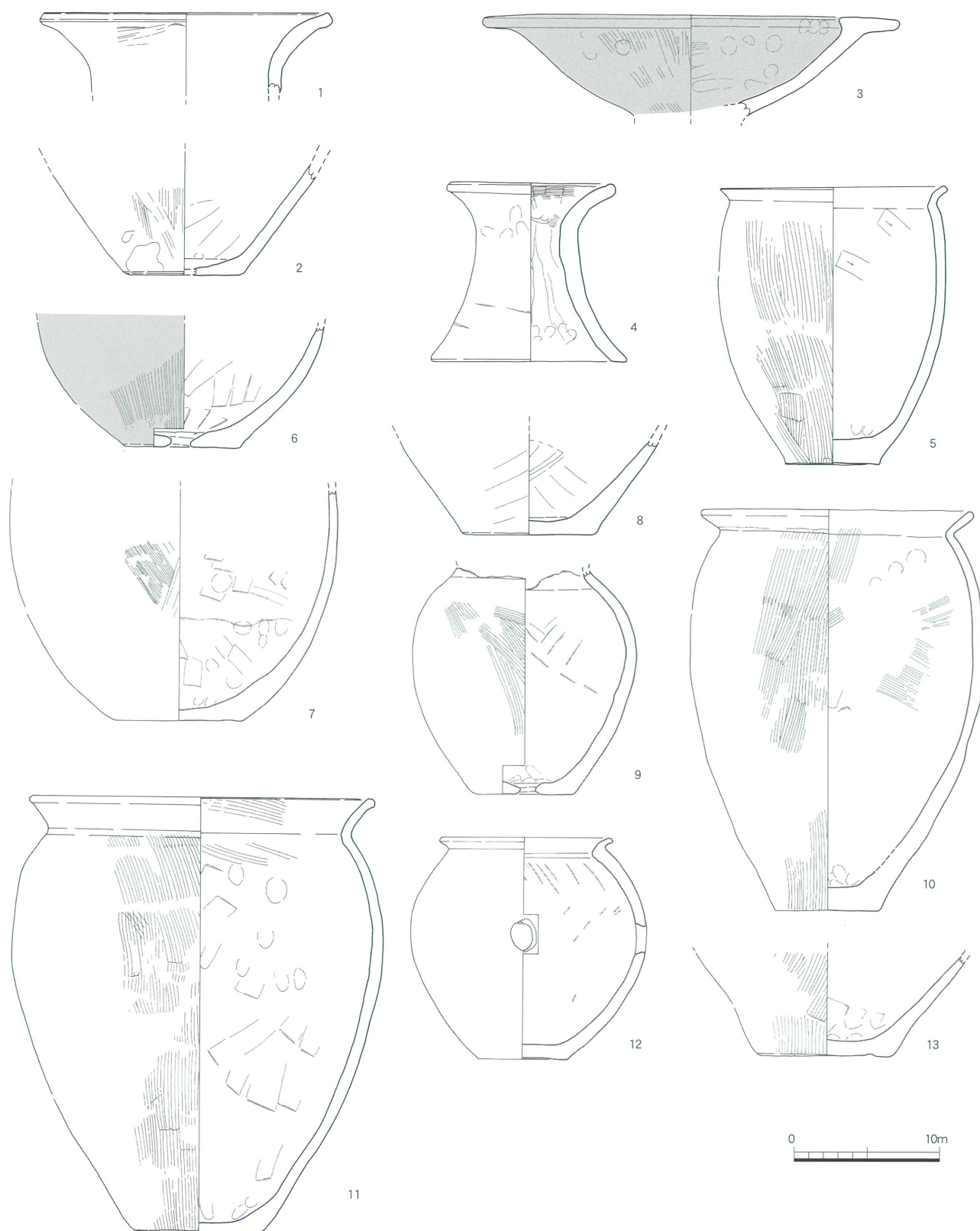
下西地区1261番地2次調査トレンチ土層断面実測図 (1/60)



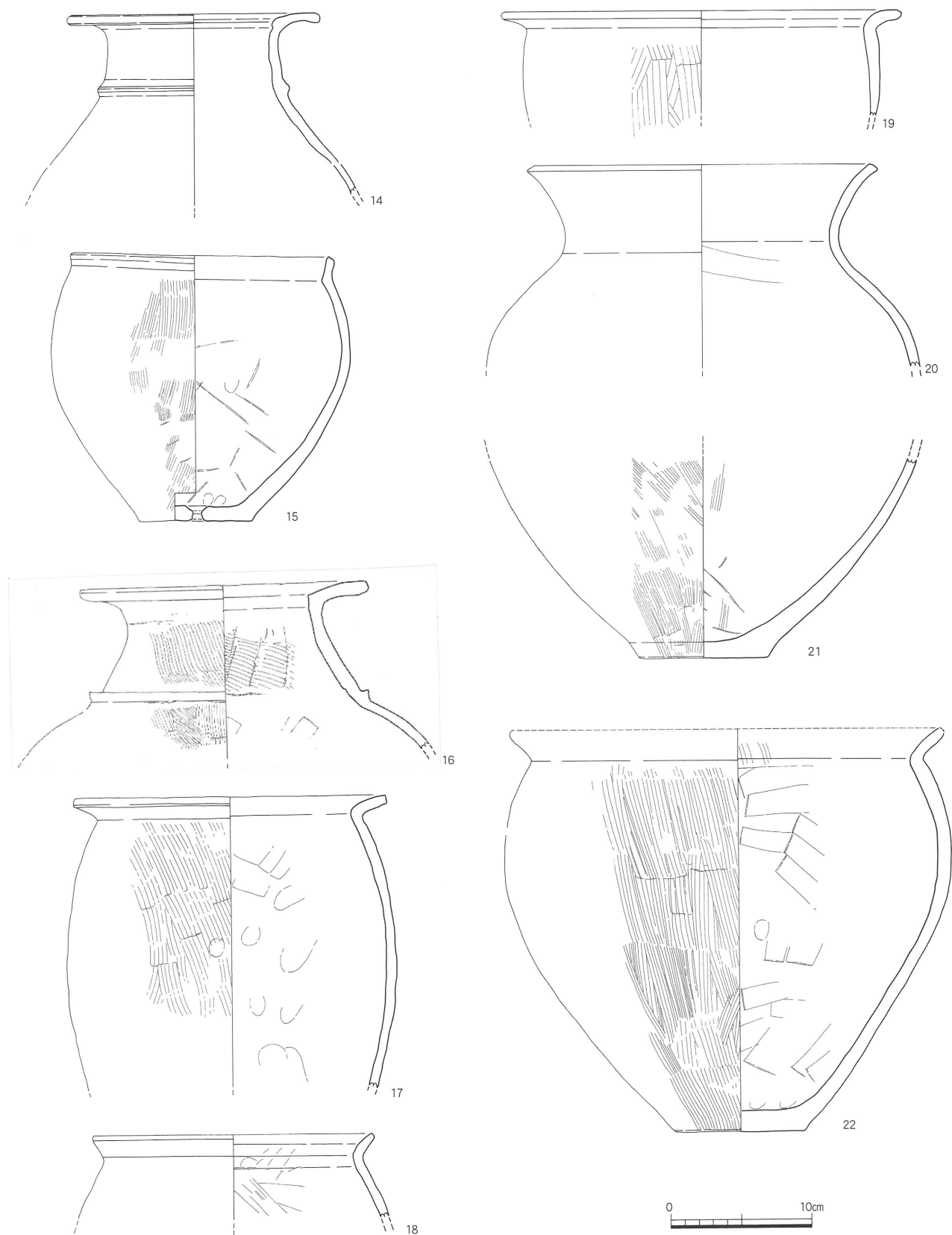
- ①暗褐色粘質土
- ②暗褐色粘質土 (土器含む)
- ③暗褐色粘質土 (黄色砂質土ブロック混)
- ④黒褐色粘質土
- ⑤暗黄褐色土 (土器含む)
- ⑥暗黄褐色土 (土器、礫含む)
- ⑦黒褐色粘質土
- ⑧暗褐色砂質土
- ⑨灰褐色砂質土
- ⑩灰褐色砂質土 (砂質ブロック多く含む)
- ⑪暗褐色砂質土 (黒褐色ブロック混)
- ⑫暗褐色砂質土 (土器・炭含む)
- ⑬暗褐色砂質土 (礫含む)
- ⑭暗褐色砂質土
- ⑮暗褐色砂質土 (礫含む)
- ⑯礫層 (土器含む)
- ⑰暗黄褐色砂土
- ⑱暗黄褐色細砂土
- ⑲暗褐色細砂土
- 地山: 黄褐色土、砂礫土

下西地区534番地第2トレンチ土層断面実測図 (1/60)

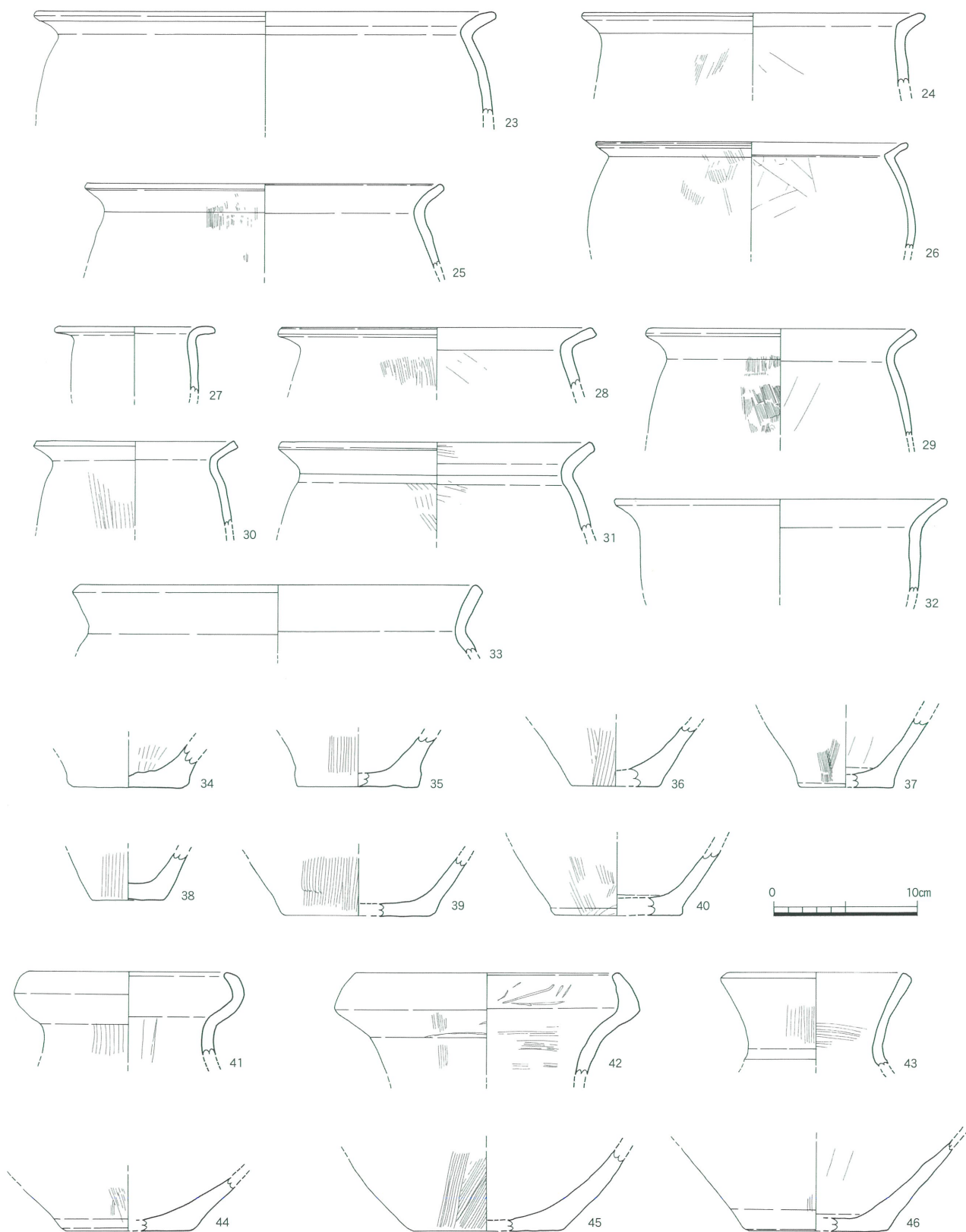
第2図 下西地区534番地、1261番地2次調査区画溝土層断面実測図 (1/200、1/60)



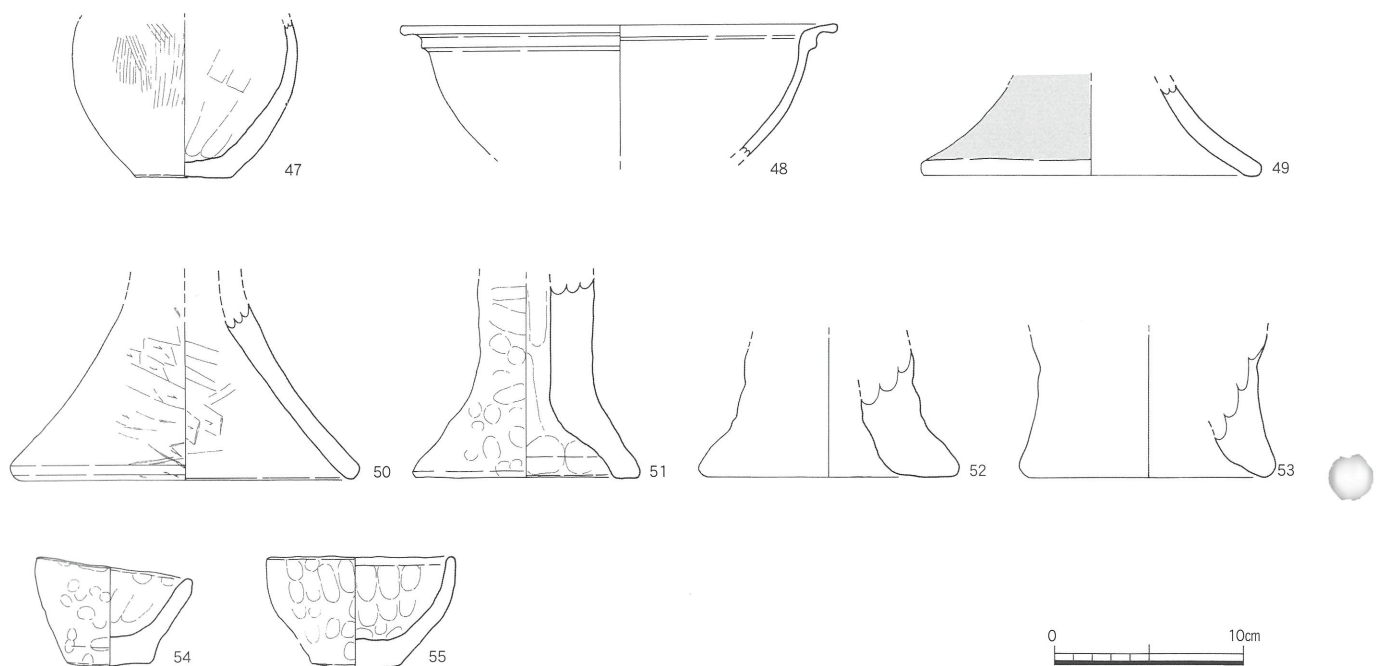
第3図 下西地区1261番地 2次調査区画溝出土土器実測図① (1/4)



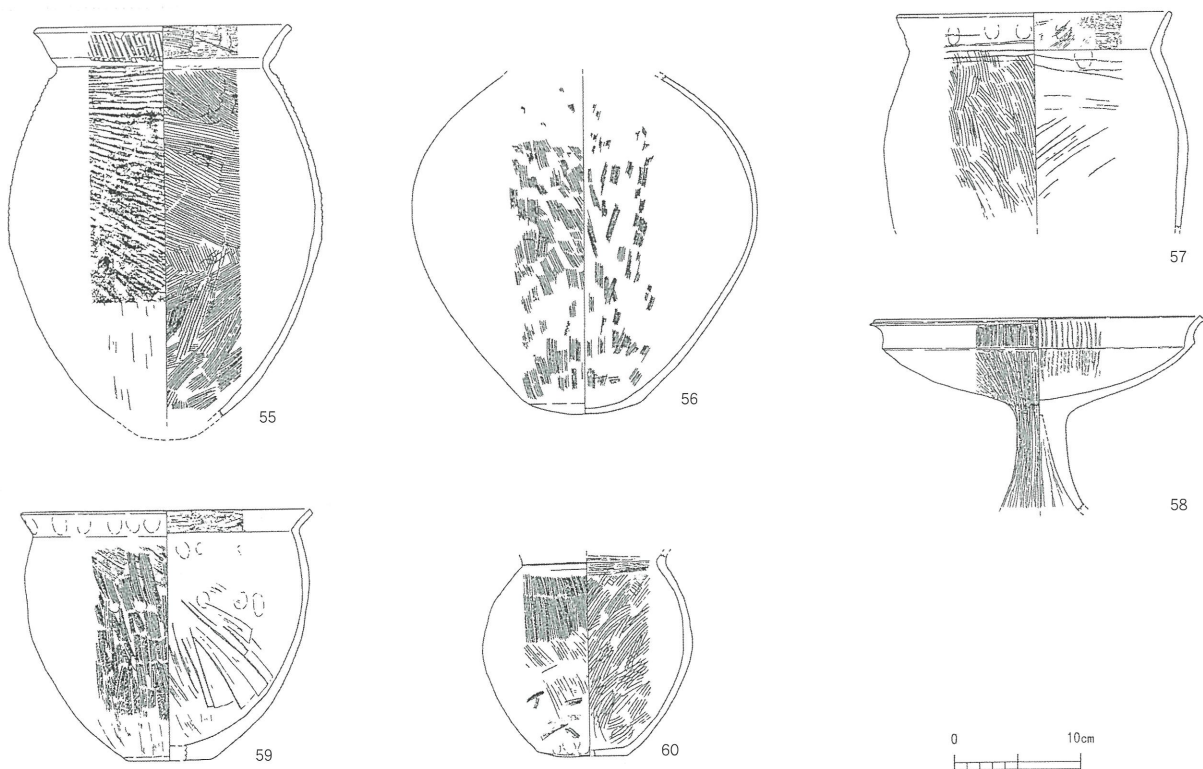
第4図 下西地区1261番地 2次調査区画溝出土土器実測図② (1/4)



第5図 下西地区1261番地 2次調査区画溝出土土器実測図③ (1/4)



第6図 下西地区1261番地 2次調査区画溝出土土器実測図④ (1/4)



第7図 下西地区534番地区画溝出土土器実測図 (1/6)

3. 下西地区方形環溝の復元

平成14年度から行われた一連の調査により、北側区画溝（東西方向）で、北東コーナーと北西コーナーが確認できたことから、42～44mの方形区画が想定されたところであるが、北西コーナーから南への復元ラインについては、屋敷1261番地1次調査で確認された2号溝が可能性として指摘されている。しかしながら、出土土器から、弥生時代中期と考えられるが、断面形態、埋土、床面レベル等で区画溝と若干異なる部分があるため、一連のものは判断に迷うところである（岡部、牟田2006）。

今回の下西地区1261番地2次調査により、東側区画溝が南へと続くことが明らかとなったが、区画溝は下西地区534番地の直線ラインから、少し内側へと向かっていることから、屈曲部つまり南東コーナーに近い部分である可能性が高い。仮にここで屈曲するとして、推定ラインを西へと延長すると、屋敷地区495番地と1261番地1次調査にあたる。

屋敷地区495番地の調査では、調査区の南東側にL字に屈曲する大溝が確認されているが、本報告では特に触れられていない。そこで、調査図面を確認したところ、中世の土師皿が出土しているが、肝心の出土標高の記載がない。この大溝は中世のピットが多く切り込んでおり、そこから出土した可能性もあるため、大溝出土土器の再確認を行った。結論としては、この大溝から出土した土器は、細片が多く、中世の土器はベルト内に1点あるが、土層図には中世ピットがあるため、ここから出土したものとする。これ以外の土器は、第8図に図示しているが、1～6のうち4が弥生時代後期後半、それ以外は弥生時代中期後半の土器で、この大溝が暗褐色土層であることから、弥生時代の可能性が高い。

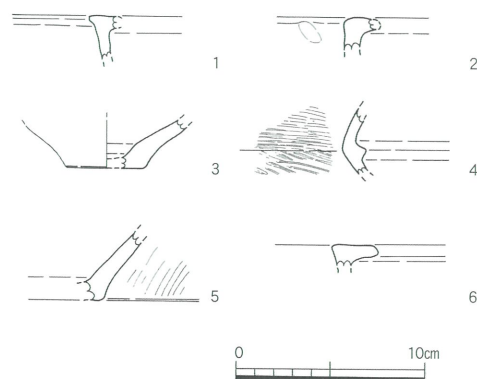
一方、屋敷地区1261番地1次調査では、1～3号の溝が検出されており、1号溝が、復元延長ライン上にあるが、本報告のとおり中世である。ところが、先ほどの屋敷地区495番地における大溝の底面標高は36.894mであるのに対して、屋敷地区1261番地1次調査の1号溝付近の遺構面標高は35.735mであり、既に大溝が削平を受け消失している可能性があり、屋敷地区495番地における大溝を区画溝の候補とすることができる。

以上の検討から、断定はできないが、北西側コーナーの延長ラインと南西側コーナーの延長ラインが重なる屋敷495番地の大溝は、南西側コーナーである可能性があり、そこから推定される方形区画は、第10図で示すような内寸で東西45m×南北38mのやや長方形を呈することとなり、推定面積は1,710㎡である。

区画溝の床面標高を比較すると、北に向かって低くなり、傾斜しており、最も低いところは北西コーナー部分である。区画溝の断面形は、北側と東側で異なっており、前者は防御性を有するV字形、後者は逆台形である。さらに、前述したように、東側区画溝のみ掘り直し、意図的な土器廃棄が行われており、最終埋没段階の廃絶祭祀と見られる。

周辺の調査では、方形環溝の東側にあたる中川屋敷地区478-1、479-1、537-2番地の調査で、落ち込みが存在し、弥生時代中期後半から埋没し始めるが、その層を切り込む形で、弥生時代後期初頭と弥生時代後期後半の溝（SD10、13）が確認されている。両溝は、方形環溝と並行しており、居館の外側を圍繞する区画溝であろうか。

方形環溝の南側にあたる屋敷地区488、489、500番地の調査では、弥生時代終末期以降の住居跡が広がるが、方形環溝と同時期の遺構が見当たらない。このことから、下西地区方形環溝は、独立的な存在であり、この圍繞された空間は、弥生時代中期後半～後期後半まで長期間維持された特殊な空間である。三雲南小路遺跡から北に300mの地点に位置し、王墓の出現と同時期に成立していることから、首長居館であった可能性があると考えられるが、今後の方形環溝内部の調査に期待するところである。



第8図 屋敷地区495番地大溝出土土器実測図(1/4)



第9図 下西地区方形環溝全体図 (1/500)

4. 下西地区方形環溝の歴史的位置付け

下西地区方形環溝は、三雲南小路遺跡の出現と同時期に成立していることや空間的な隔絶性から首長居館の可能性を指摘したところであるが、この方形環溝は、弥生時代中期後半に掘削されていることから、北部九州において最古の事例である。また、内部は不明であるものの、その内法面積は1,710㎡と弥生時代後期後半以降に現れる方形環溝を除くと最大規模である。

下西地区方形環溝がある三雲・井原遺跡は、弥生時代初頭に支石墓を中心とした集落形成が始まるが、糸島地域の中核的大規模集落となるのは、集落規模が大きく拡大する弥生時代中期後半からであり、王墓や方形環溝の出現と重なる。集落構造は、大溝を介して、北の居住域と南の墓域が設定されるが、この大溝は集落を圍繞するものではない。王墓である三雲南小路遺跡および井原鍵溝遺跡は、集落の南西側に一般墓域とは別に選地し、方形環溝は、この三雲南小路遺跡から北に約300mの地点である集落の北西側に選地していることから、弥生時代中期後半の集落拡大に伴い、集落の西側が、首長層の特別区画として設定されていると考えられる。

一方、弥生時代後期初頭になると、比恵・那珂遺跡群でも、集落研究史としても有名な1号環溝が出現する。内法面積1,054㎡の内部には、竪穴式住居5軒、井戸2基に加えて、超大型建物（150㎡以上？）が想定されており、竪穴式住居群から超大型建物への変化や前段階の甕棺墓域を破壊して造成されていることから、「公権力」の発生を示す可能性があるとの指摘がある（久住2009）。この超大型建物の形式は不明であるが、久保園タイプのような基本的に100㎡を超える超大型建物でも、必ずしも方形環溝が伴うわけではなく、集落の中核域ではない例もある中で、1号環溝の超大型建物は、中核域に位置し、方形環溝を持っている点で極めて稀有な事例である。

また、須玖坂本遺跡B地点の2、3次調査では、弥生時代後期前半の方形環溝と目される溝が検出されており、須玖遺跡群でも条溝によって、区切られた空間内に方形環溝が存在する可能性がある。

これらの遺跡は、三雲・井原遺跡が約60ha、比恵・那珂遺跡群・須玖遺跡群が100ha以上と中

核的大規模集落であり、三雲南小路遺跡や須玖坂本遺跡の「王墓」の存在から、方形環溝は、糸島、福岡地域の首長層により、導入されたものと考えられるが、この方形環溝の淵源については、武末純一氏は、楽浪郡や・帯方郡の郡地や県城あるいは三韓の国邑に求めており、京畿道漢沙里遺跡を好例とし、久住猛雄氏は、周船寺遺跡群7次調査や一の町遺跡、比恵遺跡群などの調査例から、それ以前の直線的・方形志向の空間が発展し、顕在化する形で方形環溝が成立したとしている（武末2012、久住2003）。

このことから、前段階から、集落内部における建物配置の方形志向の素地が形成された上で、首長層の出現を契機に、外部からの方形環溝の導入された可能性を考えておきたい。

その後、三雲・井原遺跡下西地区の方形環溝は、弥生時代後期後半には埋没し、継続する新たな方形環溝は認められないが、弥生時代終末期から集落レイアウトに変化が生じており、弥生期の集落域に端山古墳（4世紀前半）、築山古墳（4世紀中頃～後半）の前方後円墳が築かれている。したがって、方形環溝の終焉後も集落自体は継続しており、拠点集落としての性格は維持されていると見られる。

一方、比恵・那珂遺跡群では、弥生時代後期中頃の3号環溝（内法面積1,287㎡）に引き続き、弥生時代終末には、道路の建設により、集落レイアウトが変わり、2号環溝（内法面積4,020㎡）が成立する。それは、玄海灘沿岸地域で最大規模の方形環溝であり、古墳時代初頭に出現する那珂八幡古墳との関係が注目されているほか、継続的な方形環溝の造成から、古墳時代首長居館の先駆的なあり方としての重要性が指摘されている。集落自体は、古墳時代前期中頃まで集落規模と遺構分布が保持され、古墳時代前期末に遺構が激減するようである（久住2003、2018）。

さて、武末純一氏は、方形環溝について、弥生時代の環溝集落内部の方形環溝が、外へ独立して、古墳時代の首長居館が成立したとする発展段階「円形の中の方形（A類型）→円形の外の方形（B類型）→円形のない方形（C類型）」を説明し、比恵・那珂遺跡群の方形環溝をA類型、須玖遺跡群をC類型の「都市」として評価し、三雲・井原遺跡の方形環溝もA類型として評価している

ようである（武末1991, 2006）。一方、久住猛雄氏は、比恵・那珂遺跡群について、集落全体を囲む環濠は存在せず、直線的な条溝によって区画され、その条溝の東西に井戸や建物が展開していることから、須玖遺跡群と同じ「都市」であり、C類型としている（久住2003）。

筆者は、三雲・井原遺跡においても集落全体を囲繞するような環濠は存在せず、方形環溝の出現当初から特別区画として独立性が高いことや王墓の出現と同時期に方形環溝が成立していることから、「都市」であるかどうかは別としてもC類型と考えておきたい。

このように、比恵・那珂遺跡群や三雲・井原遺跡では、方形環溝の埋没時期と集落の終焉時期とが、必ずしも一致しているわけではなく、拠点集落として継続している可能性が高い。

また、両遺跡では、弥生時代終末期～古墳時代初頭には、集落構造に大きな変化が生じ、博多湾沿岸に新たな対外交渉拠点が成立するが、玄海灘沿岸地域－山陰地域－近畿地域を結ぶ新しい交流ネットワークが形成され、新たな秩序が反映されたものと考えられる。

この頃、糸島地域では、40面もの銅鏡を有する平原遺跡が出現し、玉造り（潤地頭給遺跡）や製塩（今山遺跡）など新たな生産と流通が展開する局面であり、三雲・井原遺跡における集落構造の変化は、当時の政治動向を反映したものと考えられる。

5. おわりに

本稿では、三雲・井原遺跡下西地区の方形環溝の復元や歴史的な位置づけについて検討を行った。下西地区方形環溝は、調査制限により内部構造や陸橋部の有無が不明であり、今後の調査に期待したい。

また、最後に「有明型」を除く、北部九州の方形環溝の一覧表及び遺構図を参考として掲載している。今後の研究の一助となれば幸いである。

【参考文献】

（論文等）

- 石野博信1990「1. 総論」『古墳時代の研究 2集落と豪族居館』雄山閣
- 蒲原宏行2002「三世紀の北部九州－佐賀平野・志波屋遺跡群を中心に－」『3世紀のクニグニ・古代の生産と工房』考古学研究会
- 北島大輔2012「山口における古墳出現期の首長居館－下東遺跡の方形環溝と朝田墳墓群－」『古文化談叢』第68集 九州古文化研究会
- 久住猛雄2000「奴国の遺蹟－須玖・岡本遺跡群と比恵・那珂遺跡群－」『考古学から見た弁辰韓と倭』九州考古学会・嶺南考古学会第4回合同考古学会
- 久住猛雄2003「北部九州における弥生時代の特定観光区画と大型建物の展開」『日本考古学協会2003年度大会研究発表要旨』日本考古学協会
- 久住猛雄2009「比恵・那珂遺跡群～弥生時代後期の集落動態を中心として～」埋蔵文化財研究集会2009資料集
- 久住猛雄2018「最古の「都市」～比恵・那珂遺跡群～」『古墳時代における都市化の実証的比較研究－大阪上町盆地・博多湾岸・奈良盆地－』資料集（公財）大阪府博物館協会大阪文化財研究所
- 久住猛雄2019「筑前西部～中部（糸島・早良・福岡平野周辺・糟屋・二日市地狭北半）の弥生時代終末～古墳時代前期の集落・集落動態・首長居館・交易拠点」『集落と古墳の動態Ⅱ－古墳時代前期末～古墳時代中期－追加資料』九州前方後円墳研究会
- 武末純一1991「弥生時代のおわり」『弥生文化』大阪府立弥生文化博物館
- 武末純一2006「三世紀のツクシの住居と集落」『邪馬台国の時代のツクシとヤマト』学生社
- 武末純一2012「弥生・古墳時代集落構造論序説」『日韓集落の研究－弥生・古墳時代および無文土器～三国時代－（最終報告書）日韓集落研究会
- 寺沢薫1998「集落から都市へ」『古代国家はこうして生まれた』角川書店
- 森本幹彦2011「②集落空間の変化、集落フォーメーションの展開」『弥生時代の考古学4古墳時代への胎動』同成社
- （報告書等）
- 岡部裕俊、牟田華代子編2006「三雲・井原遺跡Ⅴ－屋敷・下西地区の調査－」前原市教育委員会
- 佐藤正義1993「夜須中学校遺跡」夜須町文化財調査報告書第25集 夜須町教育委員会
- 佐々木隆彦編1985「東小田遺跡群 朝倉郡夜須町所在峯遺跡・七板遺跡F区の調査」福岡県文化財調査報告書第70集 福岡県教育委員会
- 折尾編1996「蒲田・水ヶ元遺跡－九州自動車道福岡インターチェンジ東隣線跡井鉄工所用地の調査－」福岡市埋蔵文化財調査報告書第491集 福岡市教育委員会
- 赤崎敏男2005「八女市南部地区県営圃場整備事業地内埋蔵文化財調査報告書1 福岡県八女市南部地区所在遺跡の調査報告書」八女市文化財調査報告書第71集 八女市教育委員会
- 大塚恵治編2012「深田遺跡（2～4次調査） 福岡県八女市酒井田・緒玉所在遺跡の調査報告書」八女市文化財調査報告書第93集 八女市教育委員会
- 上村佳典編『屏賀坂遺跡』北九州市文化財調査報告書第23集北九州市教育委員会
- 佐藤道文2002「太宰府・佐野地区遺跡群13 殿城戸遺跡第7次調査」太宰府市の文化財第62集 太宰府市教育委員会
- 水原道範2005「市ノ上東屋敷遺跡 発掘調査概要報告書
- 久留米市文化財調査報告書第208集 久留米市教育委員会
- 木村達美2014「みやこ町内遺跡群Ⅷ 福岡県京都郡みやこ町犀川大熊地区所在遺跡の調査（遺構編）」みやこ町文化財調査報告書第11集
- 末永弥義・木村達美2017「みやこ町内遺跡群Ⅸ 福岡県京都郡みやこ町犀川大熊地区所在遺跡の調査（遺物編）」みやこ町文化財調査報告書第15集
- 飛野博文1998「郷ヶ原遺跡 福岡県築上郡大平村大字下唐原所在遺跡の調査」一

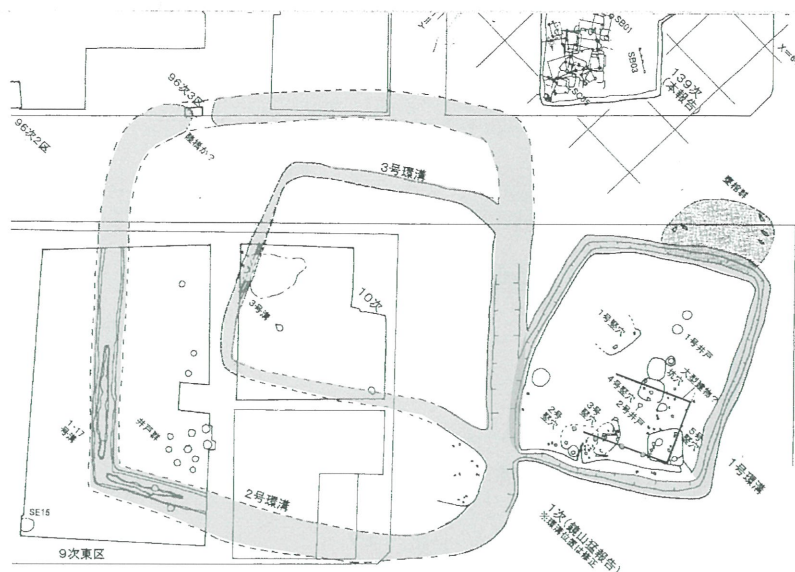
般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第10集
岡田諭2013『延永ヤヨミ園遺跡－Ⅴ区－1・2・3区－』 県道直方行橋線道路改良事業関係埋蔵文化財調査報告1 福岡県文化財調査報告書第238集
城門義廣2014『延永ヤヨミ園遺跡Ⅱ区2 福岡県行橋市大字延永、吉国所在遺跡の調査』東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告第11集
城門義廣2015『延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ区Ⅱ（第1分冊） 福岡県行橋市大字延永、吉国所在遺跡の調査』一般国道201号行橋インター関連関係埋蔵文化財調査報告第5集
河野正訓・柳本照男2009『立明寺地区遺跡B地点（仮称）イオン筑紫野SC開発に伴う発掘調査報告書 株式会社島田組
塩濱浩之2017『下唐原七社遺跡 県営担い手育成事業（唐原地区）に伴う埋蔵文化財報告書』上毛町文化財調査報告書第22集 上毛町教育委員会
丸尾弘介2017『下東遺跡3』山口市埋蔵文化財調査報告第119集 山口市教育委員会
吉武学1997『野多目A遺跡4－野多目A遺跡群第4次調査報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第527集 福岡市教育委員会
八尋実1996『右原祇園町遺跡』神崎町文化財調査報告書第52集 神崎町教育委員会
二宮忠司1992『福岡市西区国史跡野方遺跡環境整備報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第313集 福岡市教育委員会
井上裕弘1984『穴江・塚田遺跡』嘉徳町文化財調査報告書第4集 嘉徳町教育委員会
荒牧宏行1999『橋本一丁田遺跡・女原遺跡－橋本一丁田遺跡群第3次調査－ 女原遺跡群第5次調査－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第616集 福岡市教育委員会
久住猛雄2014『笹原3－笹原遺跡第4次発掘調査報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1224集 福岡市教育委員会
佐賀県教育委員会 2015 『佐賀県文化財調査報告書207：吉野ヶ里遺跡』佐賀県教育委員会

番号	遺跡名	場 所	遺構名	内法面積 (㎡)	内部・外部施設	時 期
1	三雲・井原遺跡下西地区	福岡県糸島市	方形環溝	1,710	—	弥生中期末～後期後半
2	比恵・那珂遺跡群	福岡県福岡市	1号環溝	1,054	超大型建物1 (187㎡以上) 竪穴式住居5、井戸2、柵列	弥生後期初頭～前半
			3号環溝	1,287	外部に井戸群	弥生後期中頃～後期後半
			2号環溝	4,020	外部に大型井戸1	弥生後期末～古墳前期
3	須玖坂本B地点	福岡県春日市	方形環溝?	—	—	弥生時代後期前半
4	蒲田水ヶ元遺跡	福岡県福岡市	方形環溝	59.5	長方形総柱柱建物1 (16.5㎡) 20mほど離れて住居群	弥生後期後半
5	野方中原遺跡	福岡県福岡市	方形環溝 (B溝)	713	掘立柱建物2 (21.6、12.4㎡)	弥生終末にA溝と共存
6	笹原遺跡	福岡県福岡市	方形区画環溝 (SD-001,002)	144 (推定185)	掘立柱建物4 (20.4、5、5.5㎡) 1軒は調査区外で規模不明	古墳初頭～中期前葉
7	野多田A遺跡	福岡県福岡市	方形環溝 (日) (SD-10,37)	910～ 北区画595	北区画中央西寄りに 総柱建物1 (18.23㎡)	古墳初頭
8	橋本一丁田遺跡	福岡県福岡市	方形環溝 (SD14)	104～(推定156)	東辺は2重溝、ピット9	古墳前期前半
9	東小田七板遺跡	福岡県筑前町	方形環溝(溝5)	—	—	弥生後期中～後半
10	立明寺地区遺跡B地点	福岡県筑紫野市	方形環溝? (28-S0009)	—	—	弥生後期後半～終末
11	屏賀坂遺跡	福岡県北九州市	方形環溝	—	竪穴式住居3	弥生後期後半～終末
12	殿城戸遺跡	福岡県太宰府市	方形環溝 (7SD100)	324	南東隅に掘立柱建物1 (20.24㎡)	古墳初頭
13	穴江塚田遺跡	福岡県嘉穂町	方形環溝	575	—	古墳前期前半
14	市ノ上東屋敷遺跡	福岡県久留米市	方形環溝 (SD1～5)	535	長方形総柱建物1 (32㎡) 柵列あり	弥生終末～古墳初頭
15	山口遺跡A地区	福岡県苅田町	方形環溝	327	不明	古墳初頭～前期前半
16	延永ヤヨミ園遺跡	福岡県行橋市	方形環溝 (III-A B区)	290	ピット17	弥生終末～古墳前期前半 古墳前期前半に拡張
			方形環溝(日)(II区)	720～	竪穴式住居1	弥生終末～古墳前期前半 古墳前期前半に内部を区画
			方形環溝 (V区)	460～	—	古墳前期前半～前期後半
17	大熊条里遺跡	福岡県みやこ町	方形環溝?	—	—	古墳初頭～前期前半
18	唐原地区遺跡群 (郷ヶ原遺跡)	福岡県上毛町	方形環溝? (4号方形環濠)	132	不明	古墳初頭
19	右原祇園町遺跡	佐賀県神崎市	方形環溝 (SD1035)	458 (推定841)	布掘り小溝 (柵列)	古墳初頭～前期前半
20	小迫辻原遺跡	大分県日田市	1号方形環濠建物	1,369	総柱建物1 (26㎡)、布掘り小溝	古墳初頭
			2号方形環濠建物 (布掘り内676)	1,024	総柱建物2 (56、48㎡、布掘り) 布掘り小溝	古墳初頭
			3号方形環濠建物	324	掘立柱建物1 (30㎡)	古墳初頭
21	下東遺跡	山口県山口市	方形環溝 (日)	1,160～ 南区画754	不明	古墳初頭

第1表 北部九州における方形環溝一覧 (有明型を除く)



三雲・井原遺跡下西地区 (1/1,250)



比恵・那珂遺跡群 (1/1,250)



東小田七板遺跡 (1/1,250)



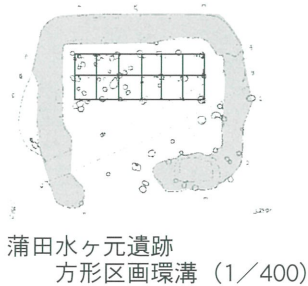
野方中原遺跡B溝 (1/800)



野方中原遺跡 (1/1,250)



蒲田水ヶ元遺跡 (1/1,250)

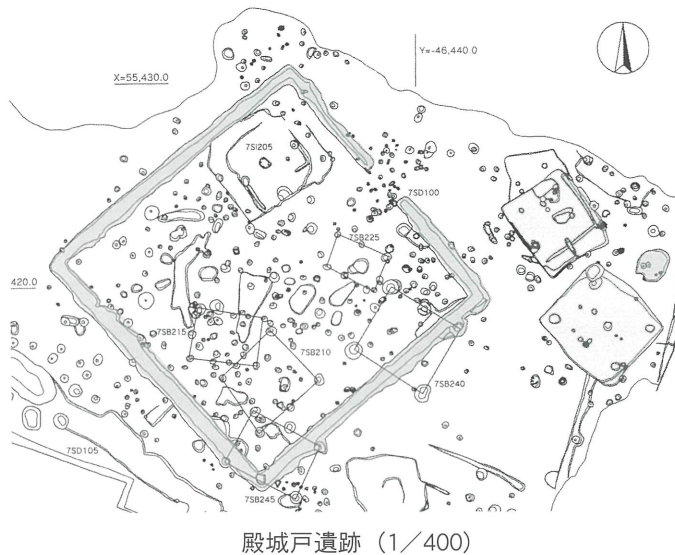
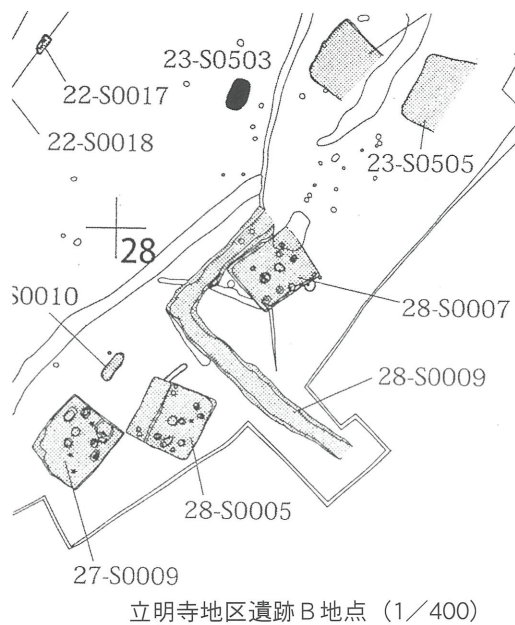
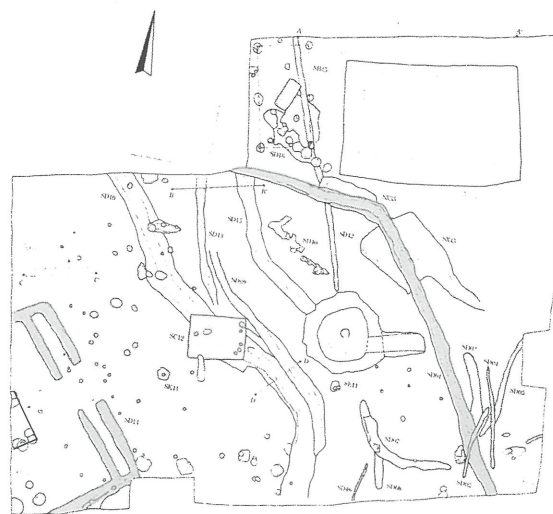
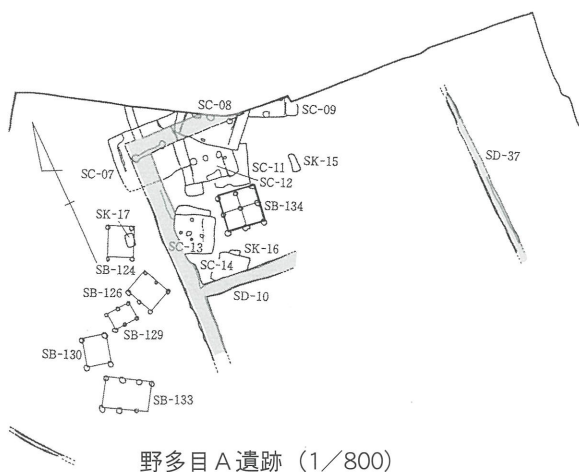


蒲田水ヶ元遺跡
方形区画環溝 (1/400)

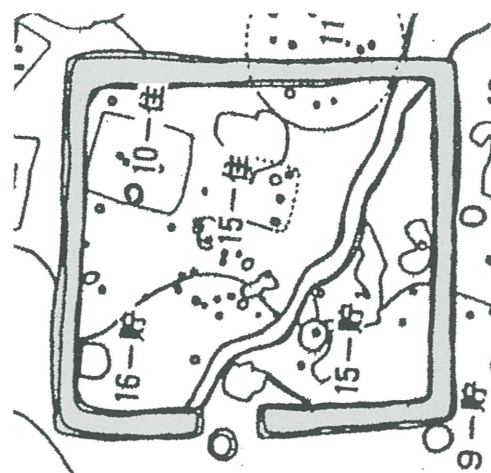


笹原遺跡 (1/400)

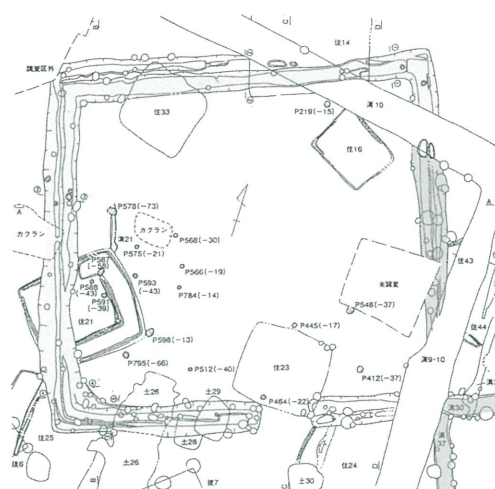
第10図 北部九州における方形環溝①



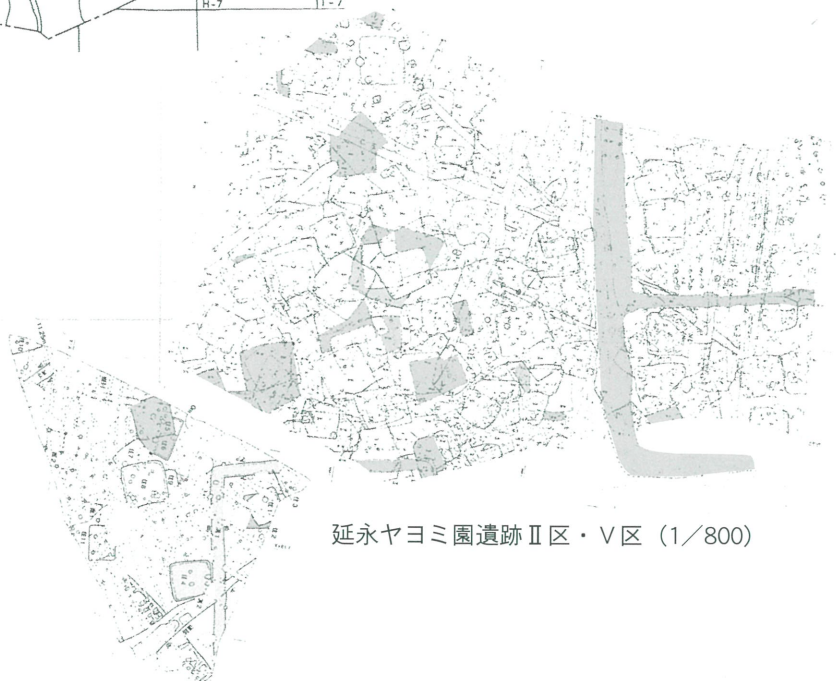
市ノ上東屋敷遺跡 (1/400)



山口遺跡A地区
(左図：1/800, 上図：1/400)



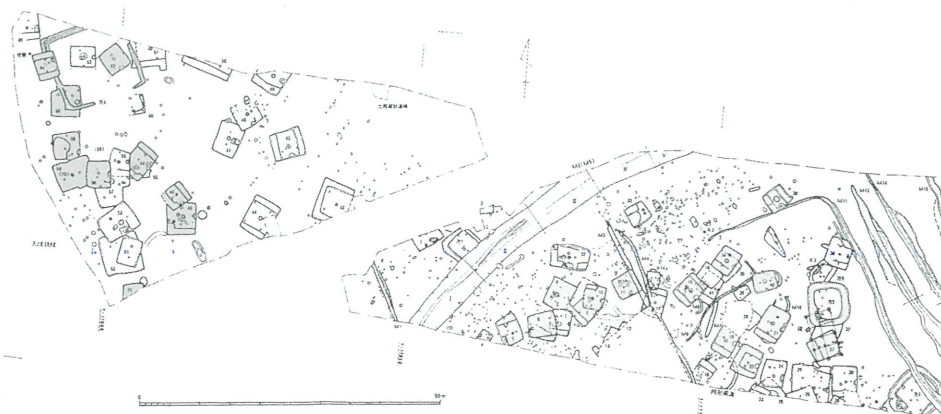
延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ・AB区 (1/400)



延永ヤヨミ園遺跡Ⅱ区・V区 (1/800)



大熊条里遺跡 (1/800)

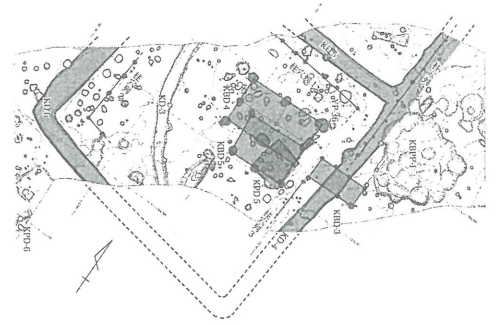


唐原地区遺跡群 (郷ヶ原遺跡) (1/1,250)

第12図 北部九州における方形環溝③



右原祇園町遺跡 (1/800)



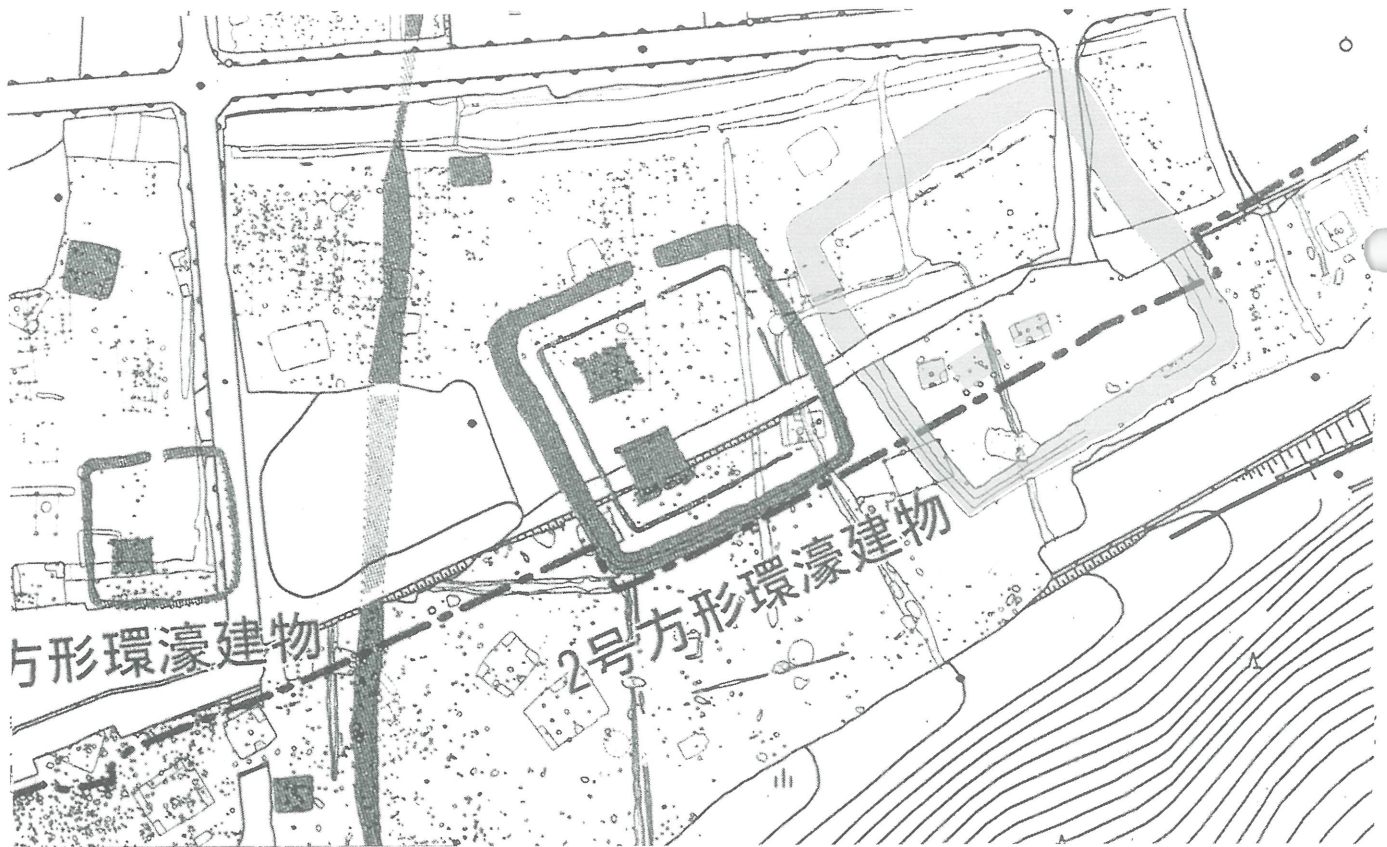
下東遺跡 (1/800)



小迫辻原遺跡Ⅲ期 (1/7,000)



小迫辻原遺跡Ⅳ期 (1/7,000)



小迫辻原遺跡 (1/1,000)

第13図 北部九州における方形環溝④